

論文式試験問題集
〔一般教養科目〕

[一般教養科目]

エリート（選良）という言葉は、今日、両義的な意味合いで用いられる。例えば、「トップエリートの養成」というと、肯定的な含意がある。これに対して、「エリート意識が高い」というと、否定的な含意がある。エリートをどう捉えるかは、社会をどう捉えるかと同等の、極めて根源的な問題の一つである。

「エリートとは何か」をめぐる、以下の二つの文章を読んで、後記の各設問に答えなさい。

[A] 「エリートとは何か」は、それぞれの社会の持つ歴史的・地理的な制約によって、その様相が異なる問題である。

これに関連して、イタリアの経済学者・社会学者 V.F.D. パレートは、「エリートの周流」(circulation of elites) という理論を提示している。この理論は、エリートが周期的に交替する(旧エリートが衰退し、新エリートが興隆する)ことを、一つの社会法則として提示しようとしたものである。

パレートはこう説く。エリートは、本来、少数者(特定の階級)の利益を代表している。新エリートは、当初、(旧エリートの階級性を批判しつつ)多数者の利益を代表して登場する。しかし、旧エリートと交替すると、今度は少数者の利益を代表するようになる、と(「社会学理論のひとつの応用」1900年による。)

[設問 1]

[A]の文章中のパレートの理論を参照しつつ、近代社会において「学歴主義」(学歴を人の能力の評価尺度とすること)が果たしてきた役割について、15行程度で論じなさい。

[B] 現代社会(ここでは、「現代社会」という言葉を、古典的な近代社会に対して近代的な近代社会という意味内容で用いている。)が、いかなる様相を持つ社会であるかは、当該社会に生きる私たちにとって現実的な問題である。

例えば、アメリカの経営学者 P.F. ドラッカーは、「ポスト資本主義社会」という概念を提示している。

ドラッカーはこう説く。従来の資本主義社会では、土地・労働・資本の三つが、生産の資源であった。しかし、今日のポスト資本主義社会では、知識が生産の資源になる。資本主義社会では、資本家と労働者が、中心的な階級区分であった。しかし、ポスト資本主義社会では、知識労働者とサービス労働者が中心的な階級区分になる、と(『ポスト資本主義社会』1993年による。)

このドラッカーの主張は、エリートとは何かを論じる目的でされたものではないが、現代社会において「エリートとは何か」を考える上で、一つの素材となり得るものである。

[設問 2]

[B]の文章中のドラッカーの主張を素材として、現代日本社会におけるエリートとは何かについて、10行程度で論じなさい。